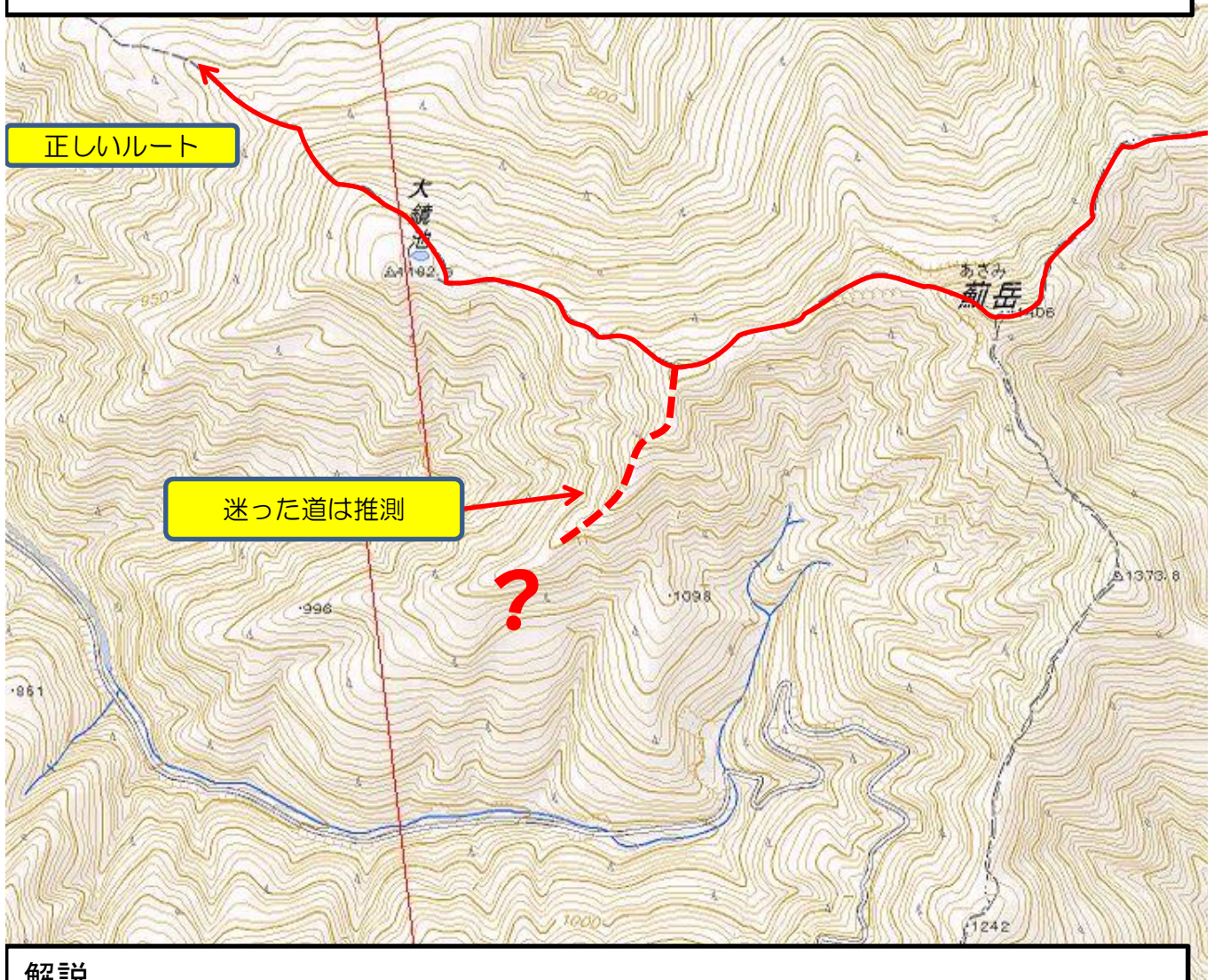


薊岳遭難(2012年8月)

中学の山岳部員10人と引率教諭2人が、悪天候により下山ルートを見失った。3~4人ずつテントのシートにくるまり、励まし合って一晩耐え、翌日救助された。



解説

平成21年(2009)の台風18号で登山道の崩落や倒木等でしばらく通行止めになったほど周辺の登山ルートは荒れていた。入山日午後には霧も出て視界不良の中、同校一行は「飲み水がなくなり、午後4時頃、水をくむため沢に下りたところ、道がわからなくなってしまった」という。

登山道を外れた12人は、「むやみに歩き回るのは体力を消耗して危険」と待機を決断し、翌日、救助隊に発見された。今回のケースも多くの道迷いと同様、分岐でコンパスや地図を使わず、倒木帯を進んでしまったようである。

読図で大切なものは、①体力、②冷静、③技術だと考えている。倒木帯が現れ、道が不鮮明になったとき、頼るものは？赤テープ？地図？コンパス？GPS？

平成21年当時はスマホの地図アプリは普及していないので、地図とコンパスで現在位置を確認しながら進むか、やはり来た道に戻るかの選択になっただろう。ただ、全員無事であったのは、引率教諭の方の判断が正しかったと思う。